

笛

五月のある日、次の予定まで時間が出来たので、思い立って電車に乗ってみることにした。ところは四国・高松。町を歩き回っているうちに、ことでの片原町駅に着いたからだ。

パチン。適当な距離まで買った切符に、改札口で女性の係員が鉄を入れてくれた。あら、懐かしい、この感じ。昔のような厚紙の切符ではないから、ちよつと遠慮がちな音だが、これだけで嬉しくなる。駅に跨線橋がないのも嬉しい。行き先なんて決めていない。とにかく来た電車に乗って、時間の許す限り行ってみようという計画（無計画）。数分後にホームに滑り込んできた電車は、ついカメラを向けたくなくなるくらいにの全面広告に彩られていた。

高松の町を車窓から眺める。乗り降り



イラスト・岡林玲生

する人たちを眺める。そうこうするうちに、住宅街の隙間にレンゲ畑や麦畑が見えてきた。なるほど、文字通り讃岐の麦秋だ。ことごと走ることでの、私が乗ったのは長尾線だった。駅名を楽しみ、景色を楽しみながら、結局は終点の長尾まで行ってしまった。駅の周りをぐるりと歩いただけで、再び逆戻り。帰りの切符を差し出すとき、パチン、と鉄を入れるから、駅員さんは、少しだけ不思議そうな顔をしていた。

帰りは二両編成の最後尾に乗った。車掌室に乗り込んできたのは若い車掌さんと、三十代くらいの指導係らしい二人。電車が出発する。緊張した面持ちの若い車掌さんがマイクを握って次の駅名を告

げる間、私の目の前では、彼が首からかけている笛が揺れていた。見るからに新しい、ピカピカの笛だ。

ことでは今、色々大変なときなのかも知れない。車両の全面広告を見たときにも薄々感じたことだが、この若い車掌さんを見ていて、その思いは確信へと変わった。何しろ、彼は忙しいのだ。電車が走っている間は、車内アナウンスがある。電車が駅についた途端、車両のドアを開けるなり、自分もホームに走り出て乗降客の切符を回収し、また駆け戻ってきて安全確認、ピーツと出発の笛を吹いて、ドアを閉める。つまり、駅員も兼ねている。若い彼は息も切らさず、再びマイクを握って次の駅名をアナウンスす

る。それを見守る指導係の人の制服は、ズボンのポケットがはつれていた。頑張れ。

つい、そう言ってあげたい気持ちになった。二人は無駄な会話はまったくせずに、ひたすら自分たちの仕事に励んでいる。ことでは、彼らにとっておそらく少年時代からの憧れであり、親しみであり、誇りなのだ。こうして一日に何往復もしながら、四季の移り変わりを感じ、人々の安全な動きを見守ることが、この人たらのかけがえのない喜びなのに違いないと思つた。

若い車掌さんは、まだ少年の面影を残していた。彼が首からさげていた、真新しいピカピカの笛が、今もはっきり印象に残っている。

文・乃南アサ
Asa NONAMI

東京都生まれ。早稲田大学中退後、広告代理店勤務などを経て、作家活動に入る。1988年『幸福な朝食』が日本推理サスペンス大賞優秀作になる。1996（平成8）年『凍える牙』で直木賞受賞。他に『ボクの町』『団欒』『風紋』『晩鐘』『鎖』『喰う闇』『しゃぼん玉』『ウツボカズラの夢』『風の墓碑銘』『ニサツタ、ニサツタ』、エッセイ集『いのちの王国』『ミャンマー』など著書多数。巧みな人物造形、心理描写が高く評価されている。